アドルフ　僕の友人？（當惑して）あゝ、そうだ、そうだ！

モーリス　君の成功は、僕にとつても悦ばしいよ。併かし君の其成功の爲めに、吾々二人の間には、一層遠い隔りが出來るんだ。

アドルフ　それは僕もよく覺悟して居るよ。君が逆境に沈淪したが爲めに、孤獨の地位に陷つたと同じく、僕は僕の成功の爲めに、矢張り孤獨の寂寥を味ふ事になるのだ。考へて見給へ――他人の幸福によつて世の中の人がどれ程心の痛みを感じるか！あゝ、生存といふことは、實際悽愴なものだ！

モーリス　君が那麼事をいつて！ては、僕は何といつたらいゝんだ？僕は宛然目の上に濃い眞黑な覆面を掛けられて居るようなんだ。そ

れが爲めに、人生の色彩も形態も、悉く變つて僕の目に映つるのだ此室も昨日僕が居た室と同じように見へるが、今では全然其感じが違つて居る。無論僕は君達二人を鑑識して居るのだが、併かし君達の顏は、僕にとつて初めて會つた人々の感じだ。僕は此所に恁うして居ても、心の中では君達に何といつたらいゝかと思つて頻りに考へて居るのだ、僕は僕自身を辯護したいと望んで居ながらそれが出來ないのだ。又せめて僕の正面から、僕に集注される燦めかしい目の閃光を避けさせて呉れる避難場だけても欲しいと思ふんだが矢張りそれも駄目なのだ。殺人犯人モーリスと其情婦が！アンリエット、お前もう私を愛して居ては不可ないよ。私も此上お前に對して何の

注意も拂ふまい。今となつては、お前は醜惡だ、淺薄だ、感興がない、唾棄したい。

此時、平服を纏ひたる男二人奥手に現はれ、忍ぶが如くに適宜の卓子に座を占む。

アドルフ　兎に角、先づ冷靜に考へて見給へ。君に對する總ての疑惑が、既に悉く氷解されたといふ事は、屹度今日の夕刊にも報道されて居る筈だ。そうすれば、君に關する問題は、全然終局を告げてしまつた事になるのだから、從つて君の劇も、復た再び上演されるようになるだらうし、若し假りにそうならなかつたとしても、君には更に新らしい創作を成し遂げるだけの手腕があるぢやないか。君が此巴里を一年間も離れて居れば、世人は皆何もかも忘れてしま

うにさまつてゐるよ。人類の寃を雪いてやつた君だもの、君自身の寃だつて、屹度雪いて貰ふ事が出來るに違ひないさ。

モーリス　はゝ！人類！はゝ！

アドルフ　では、君はもう善といふものを信じないのか？

モーリス　あゝ僕は信じない。これまでに、或は僕がそれを信じた事があつたかも知れないが、若しあつたとすれば、それは單に事物に接觸する一手段として、又野獸に禮讓あらしむる一方策として、僕が一種の樣式に捉へられて居たに過ぎないのだ。最善の圈内に箝制せられて居た僕でさへ、此通り骨の中まで腐らされてしまうものだとしたら、其圈外に棲息して居る人達は、一體什麼悽慘な報ひを受

ければいゝのだらう？

アドルフ　ては僕は兎に角街へ出て、各社の夕刊新聞を買ひ集めて來よう。そうさへすれば、何もかも皆よく解るに違ひないから。

モーリス　（奥手の方を顧みて）おや、探偵が居る！――――して見ると僕は監視附きて釋放されたのだ。こりや、うつかりものを言ふと、又自分でぼろを出す事になる。

アドルフ　あれは探偵ではないよ。唯君の妄想だ。僕はあの人達をよく鑑識して居る。（戸口に進む）

モーリス　おいアドルフ君。僕達二人限りにして出て行つては不可ないよ。アンリエットと僕とが、復た和解するような結果になると困

るから。

アドルフ　まあ、もつと理智的になり給へ。そして君の將來をよく考慮へ給へ。アンリエット、モーリス君を慰めてあげなさい。私は直に歸るから。（立去る）

アンリエット　モーリスさん、貴郎今什麼考へて居ます？妾達に罪があるか、罪がないか。

モーリス　私は誰も殺しはしないもの。唯泥酔の餘り、無意味な譫語をいつたに過ぎないのだ。併かしそれをものにしてしまつたのは、正しくお前の罪だよ。そしてそれが爲めに、私までがとんだとばしりを受けるやうな事になつたのだ。

アンリエット　まあ、よく貴郎にそんな事がいへます！貴郎こそ自分の子供を呪つて、死んでしまへばいゝといつたのぢやありませんか？又貴郎が誰れにも告別をせずに出發するといつたのを、マリヨンにも會ひ、カトリヌさんの所へも行らつしやいと勸めたのは妾ぢやありませんか？

モーリス　そうだ、それに違ひない。宥して呉れ。お前は私よりもずつと人間といふものに對する經驗に富んで居るのだ。そうだ、罪のあるのは私一人だ。宥して呉れ。だが、私だつて矢張り罪がない筈だ。それに一體誰れが私に、逃げ出す事も出來ない恁んな網を被せたのだらう？罪があつても罪がなくつて、罪がなくても罪があるのか！あゝ、私はもう發狂しさうだ――ほら、探偵の奴め、あんな所に張り込んで、私達の談話を聞き取つて居る――給仕が來ない。注文を聞きにも來ない。私が行つて茶でも命じて來よう。お前も何か欲しくないか？

アンリエット　いゝえ、何も欲しくありません。

モーリス出て行く。

探偵　（アンリエットの側に進みて）おい鳥渡鑑札を見せろ。

アンリエット　まあ何といふ失禮な事をおつしやるのです〻

探偵　失禮？ふん、今に見ろ！

アンリエット　何ですつて？

探偵　俺は密娼を取締る職務を持つて居る者だが、お前は昨日此所へ他の男と一緒に來て居た癖に、今日は又あんな男を咬へ込んで居るこれが第一お前が密娼だといふ證據だ。殊に此所は、保護者のない貴婦人の居る所ぢやない。さあ、仕度をして俺と同行しろ。

アンリエット　でも妾の保護者は今直ぐに此所へ歸つて來ます。

探偵　ふゝん、お前はいゝ保護者を持つて居るよ――若い女に對して之れつぱかりの扶助もしない感心な保護者だ！

アンリエット　おゝ、神樣！お母さん、姉さん！――だが妾は之れでも良家の娘ですよ。

探偵　そうだ、最上の家庭に育つた立派な令孃だ。それは俺もそう思

ふ。併かしお前の事は、新聞紙に掲載せられて、何もかも皆露見して居るのだ。さあ、同行しろ！

アンリエット　えゝ！何處へです？何の爲めにです？

探偵　無論警察署へだ！そして其所で檢徹濟を證明した綺麗な小札と公娼の鑑札を貰ふのだ。

アンリエット　おゝ、イエス樣！、貴方の眞意はそれと違ひます！

探偵　（誤解して）何？俺の眞意がそれと違ふ？

アンリエットの腕を掴む。

アンリエット　（膝を縮めて）早く來て、モーリスさん！助けて！

探偵　默れ！馬鹿者！

モーリス、給仕に引立てられて入り來る。

給仕　那麼紳士はもう此所に用がないんです。直ぐに仕拂をして出て行つてください。あの婦人と一緒に出ていらつしやい！

モーリス　（紙入を檢めて力なげに）アンリエット、お前拂つて呉れ。そして兎に角此所を出よう。銅貨一枚殘つて居やしない。

給仕　だからアールフオンゼー（譯者曰、アールフオンゼーは、アルフオンソ皇帝の像を鑄刻したる西班牙の古金貨にして、凡そ我が十圓に當る）一枚出せば、此婦人を連れて行けるのです。アールフオンゼーたつた一枚！貴方達はそれを見た事もありますまい。

アンリエット　（紙入の中を覗いて）まあ、什麼しよう！全然貨幣がありや

しない——アドルフさんは何故歸つて來ないのだらう？

探偵　そんなに根こそげ費つてしまう奴があるものか。ぢや何か抵當を置いて、早く出て行け！そういふ女は、よく指輪ばかりこて〳〵猶めて居るものだ。

モーリス　恁んな慘憺な淪落が、又と此世にあるだらうか？

アンリエット　（指輪を外して給仕に渡し）あの僧侶のいつたのは眞理です。これは實際人の力に及ぶ事ではありません。

モーリス　そうだ、これは惡魔の力だ！——併かし吾々が、アドルフ君の歸つて來ない内に、此所を出てしまつたら、那の男は又吾々が出し拔いて出奔したと思ふだらう。

アンリエット　それで丁度他の事と調和するんです――だが、それよりか妾達はもう河へでも投身つてしまはなければ――

モートリス　（共に立出でんとする如くに、アンリエットの手を抱へて）河へ――そうだ！

――幕――

第四幕

第一場

ラークスーンブーア離宮の庭園、アダム、イブの大理石像の前。梢を渡る風、颯々として地上の落葉、藁屑、紙片の類を吹き廻す。

モーリス、アンリエットの両人、適宜のベンチに腰を下して、對話中の態。

アンリエット　では、貴郎は死ぬのが厭なんてすね？

モーリス　厭だ！怖ろしいんだ。たつた一枚の經帷子に包まれて、鉋屑の中に寢かされて、深い冷たい墓穴の底へ埋められて行く自分といふものが、つい目の先に浮んで怖ろしいのだ。それよりも私は、まだ他に何か私の身に降り掛つた事が、私の生活の蔭に潜んでゐると

いふような氣がするよ。尤もそれが何だといふ事は、まだよく解らないが。

アンリエット　でも妾には推測が出來ますよ。

モーリス　では、いつて御覽。

アンリエット　復讐ですさ！貴郎が若し妾の立場になつて考へたら、昨日妾の所へ探偵なんかをよこしたのは、屹度あのジャンヌさんやエミールさんだといふ疑ひが起きる筈です。全體自分を捨てた男を怨まうともしないで、其對手の女ばかりに復讐をするなんて、女でなければしない事です。

モーリス　確かにそうだ。私も實はそう思つて居たのだ。併かし私の

疑ひはもつと〳〵深刻だ。つまり此數日間に受けた苦悶で、私の官能が一層鋭敏になつたと見へる。例へば、あのアドレエの給仕や、バビーヨンの給仕長が、何故證人として其筋へ召喚されなかつたかといふような事まで、明確に私の頭腦へ響いて來るのだ。だがお前にはそれが解るか？

アンリエット　妾今まで那麼事は考へても見ませんでしたわ。併かし別段何の意味もないんです。唯中立てる事實がないからなんです、あの人達は何も聞いては居なかつたのですから。

モーリス　では、什麼してあの代辯人が、吾々の談して居た事柄を知つて居るのだらう？

アンリエット　あの人だつて矢張り知つては居ないんですよ。唯推察しただけなんです。憶測が丁度むまく的中したまでの事なんです。今までにだつて之れと同じような事件を取扱つた事もあつたでしようからね――

モーリス　でなければ、吾々の態度でそれを推斷したのだ。あゝいふ職業に從事して居る人達には、概して人の意中を看破する能力のあるものだからな――して見ると、アドルフ君は愈々好人物と相場が定まつた譯だ。吾々があの男に驢馬といふ尊稱を呈したのは眞實自然だつたよ。それで私は恁う解釋するね、例令場合によつて其名稱は變るとしても、おめでたいといふ事だけは、動かすべからざる定理

だと。だが、今の場合には、驢馬といふのが最も適合して居るんだ二人で話した馬車や勝利車を輓くあの驢馬といふ名稱が、一番適切なんだ。だからお前が、お前に最も接觸して居る吾々三人といふものを一寸超越して觀察したら、其間に潛在して居る他の關連した事實だつて、屹度譯もなく推測が出來る筈だよ。

アンリエット　妾達は眞實い、案配に一杯喰はれたのね？

モーリス　それといふのが、つまり自分等の友人を餘り善意に解し過ぎたからだ。尤もお前は多少それと行方が違つては居るが――時に私はあの代辯人の後ろに、まだ一人黑幕が居ると思ふよ。そして其黑幕こそ實際侮り難い曲者に違ひないんだ。

アンリエット　黒幕つてあの僧侶の事でしよう？　宛然秘密探偵のように妾達の事を探つて歩いた。

モトリス　其通りだ。全體那奴は人さへ見ると懺悔をさせたがつて居る。所でほら、アドルフ君があの朝サン・ジエルマン敎會へ行つたと自分から吾々に話したらう。お前は一體あの男が、敎會へ行つて何をしたと思ふ？　無論總ての秘密を告白して自分の悲境を喞つたに定まつて居るよ。だからあの長老さてが一緒になつて、代辯人の所へ事件を持ち出してしまつたのだ。

アンリエット　では貴郎に尋ねますが、貴郎はアドルフさんを信じないんですか？

モーリス　私は全體人間といふものを信じない。

アンリエット　アドルフさんでも？

モーリス　あの男なんか猶更だ。私はあの男の戀人を掠奪したんだもの、いはゞ敵同志ぢやないか——其敵のあの男を、私が什麼して信じられるものか。

アンリエット　まあ、那麼事をいふのは貴郎ばかりです。ては妾があの人に就て知つて居るだけの事を話してあげますが、貴郎はあの人が倫敦から貰つた賞牌を送り返へしたといふ事は聞いて居るでしよう。だが何故それを返へしたか、其理由を知つて居ますか？

モーリス　いや、知らない。

アンリエット　あの人は賞牌なんかに何の價値も認めないのです。あの人はもう決して總ての榮譽を受けまいといふ懺悔の誓ひをしたんです。

モーリス　人間として那麼事が眞實に出來るものかしら？だが一體あの男は何だつて那麼誓ひをしたのだらう？

アンリエット　法律では罰せられないといふ罪を犯したからなんです――とまあ思へるような事をあの人が話したのです。

モーリス　あの男も矢張り？最も善良な性格を備へた、吾々の模範とすべき、誰れに對しても決して怒つた事のない、又如何なる事でも悉く宥してやるだけの寛大を持つたあの男も矢張り――

アンリエット　だから妾達だつて別段他の人達よりも罪の深い惡人ではないといふ事が解るでしよう。又妾達は唯妾達に附き纏つて居る惡魔の爲めに、夜となく日となく絶へず嗾かされて居るだけだといふ事が解る筈です。

モーリス　あの男でさへ！とすれば、人間といふものは今まで決して寃罪を誣ひられて居たのぢやない――だが實際アドルフ君に、苟も罪と認むべき行爲があつたとすれば、まだ他にもあの男のせいにしなければならない事がある。昨日お前の所へ警官を差し向けたのも多分あの男だつたらうし、又そうだものだから吾々が新聞を讀んで居る隙を覗つて、そつと忍び出て行つてしまつたのだ。それに吾々

に向つては探偵でないなんていひ張つて、巧く一杯喰はせたのだ。尤もお前が夢を偽つた其對手から、それつ位の復讐をされるのは、寧ろ當然の事だが。

アンリエット　あの人にそんな權謀があつたかしら？　眞逆！　迚もある譯がありませんわ。

モーリス　何故だ？　あの男が惡漢だとしてもか！――だが、一體お前は、昨日私の行くまでに、あの男と二人で何を談して居たのだ？

アンリエット　あの人は唯貴郎のいゝ事だけしか談しやしませんでしたわ。

モーリス　そりや虚偽だ！

アンリエット　（自己を制しながら、語調を變へて）まあ、お聞きなさい。それよりも他に疑はしい人があるのに、貴郎は少しも其人を怪まないなんて、妾には全然譯が解りませんわ。貴郎はあのカトリヌ夫人の、不安らしい態度に氣が附かないのですか？　殊にあの人が最後に、貴郎は何かやり兼ねない男だと思ふといつたぢやありませんか？

モーリス　あゝ、いつた。だからあの人の眞の人格が窺はれるのだ。それに理由もなく人を惡人だなんて、お前の方が却つて惡人だ。

アンリエット　鋭くモーリスを凝視す。間。

アンリエット　人を惡人だなんて、貴郎こそ却つて惡人です。

モーリス　何だつて？

アンリエット　今いつた通りてすよ。

モーリス　私の事をいつたのか？　惡人とは——

アンリエット　えゝ、そうてすとも。鳥渡貴郎！　昨日の朝貴郎はマリヨンの外にまだ會つた人があるてしよう？

モーリス　何故那麼事を尋くのだ？

アンリエット　知つて居ますよ！

モーリス　ては、話すが——ジャンヌにも會つた。

アンリエット　それだのに、何故私を欺したのてす？

モーリス　お前を怒らせまいと思つて。

アンリエット　それて貴郎は、私を欺して置きながら妾にまだ其の

欺した貴郎を信じろとおつしやるのてすか？　ほゝ、戯談てしよう。妾は貴郎が、あの殺人犯の犯人だといふ事ても信じましようよ。

モーリス　まあ、お待ち！　今といふ今こそ、吾々二人は、到々私が絶へず心配してゐた所まて來てしまつたのだ。無論私はそんな事のないようにと思つて、出來るだけの骨は折つたけれども——だが、不思議な現象ぢやないか。欺かれた人間の虚僞が、結局欺いた人間の爲めに看破せられて、人を信じようともしなかつた人間が、却つて人から信じられなくなつたのだ——所てお前に尋ねるが、昨日の朝あの割烹店で私と別れてから、お前は一體何處へ行つたのだ？

アンリエット　（驚愕して）何故てす？

モーリス　まあ、アドルフ君の所か――それともあの男との間にはまだ宿題が殘つて居るので、訪ねられないとしたら――マリヨンの所か何方かへ行つたに違ひない。

アンリエット　それて愈々貴郎があの殺人犯人だといふ事が確かに解りましたよ。

モーリス　お前こそ其犯人だ！あの子供を殺して――つまりお前が熱心に勸めた通り、道路に横つて居る石を取除く事が出來て、それが爲めに利益を感じるのは、お前唯一人ぢやないか。

アンリエット　貴郎こそそれをいひ出した癖に。

モーリス　全體罪惡といふものは、常に其行爲によつて、何等かの利

益をられる者が犯すのだ。

アンリエット　ね、モーリスさん、妾達は恁うやつて、お互を鞭ちながら、この一つ踏車をぐる〳〵、ぐる〳〵廻して居るのですよ。もう二人とも純粹の狂人になつてしまわない内に、お互に靜寂にならうぢやありませんか？

モーリス　お前はもう殆んど純粹の狂人になり掛つて居るのだ。

アンリエット　貴郎、丁度今が妾達二人の別々になるべき時期だと思ひませんか？お互を狂人にしてしまはない内に。

モーリス　そうだ。私もそう思ふ。

アンリエット（立上つて）では、左樣なら！

平服を着けた男二人奥の方に現はる。

アンリエット　（再びモーリスの側に戻りて）ほら、あの人達が又來て居ますよ。

モーリス　あの馬鹿な天使達は、吾々をエデンの花園から追ひ出そうとして居るのだ。

アンリエット　そして又舊の通り妾達二人を一本の鎖で繋がうと思つて骨を折つて居るのですよ。

モーリス　そうでなければ、吾々二人を復た以前のように生涯離れる事の出來ない結婚といふものて罰する爲めにだ――だが二人て眞實に結婚しようか？吾々二人が、一つ所へ落込んて、後ろの戸を、ひ

つしやりと閉めてしまへるように結婚をしようか？そうすれば結局安心かも知れないから。

アンリエット　そして宛然妾達の持參金ともいふべきあの人達の怨靈て、其後ろの戸へ確乎と錠や門を差し固めて、お互に死ぬ程激しく窘めつこをする爲めに、自分々々といふものを其中へ閉ぢ籠めてしまうのですよ。それて貴郎は、屹度アドルフさんに對する記憶で、妾を什麼にか困らせるでしようし、妾は又ジャンヌさんや――あのマリヨンの事で、貴郎を一生懸命に苦しめるのですわ。

モーリス　もう二度とあのマリヨンといふ名を聞かせて呉れるな。お前はあの子供が今日――しかも丁度今頃、葬られて居るのだといふ

事を知らないのか？

アンリエット　それに貴郎は其葬式にも行かないなんて一體什麼した譯なんてす？

モーリス　ジャンヌや警官が周圍の憤りに就て私に注意して呉れたから。

アンリエット　まあ、小膽ね？

モーリス　總て私が惡いのだ。だが、お前は何故私なんかを愛して居たのだ？

アンリエット　でも二日前には、貴郎の人格が全然今とは違つて居ましたもの。社會からわい〳〵稱め立てられる立派な劇作家で——

モーリス　それに今では恁んなみじめな逆境に沈淪して居るのだ！

アンリエット　それは違いますわ。貴郎は自分がそうでもない癖に唯逆境を衒ひたがつて居るだけなんてすよ。

モーリス　てはお前がみじめだといふのか？

アンリエット　まあそうてす。全體貴郎に何か少し位惡い所が見へ出しても、妾にはすぐにそれが、幾分善く感じるのてすもの。

モーリス　それては宛然人の自負心を強くした上に其人の他の缺點まで多くするような事になるよ。

アンリエット　貴郎はまあ何といふ凡俗い人間になつたのてしよう！

モーリス　そうだ。自分てもそれは覺つて居るよ。拘留場の冷たさ、暗

さを味つたあの晩からは、私はもう自分が自分でなくなつてしまつたのだ。今までとは全然違つた別種の人間にされて、吾々二人と社會の多衆とを嚴密に隔離する其門から、別天地へ追放されてしまつたのだ。今となつては、總ての人類が、皆悉く私の敵だといふような氣がする。あ、、此世の中に、私の耻辱を燒き盡して吳れる宇宙滅燼の刼火にも劣らぬ大火災を起して、太洋を干上げるような目に遇はせてやりたい。

アンリエット　それはそうと今日母から手紙が來ましたの。一體妾の母といふのは陸軍少佐の未亡人で、可なり教育もありますが、名譽といふような事に對しては、隨分舊い思想を持つて居る人なんですす

貴郎其手紙を讀んで見ませんか？いゝえ、まあ讀まない方がいゝわ——だが妾實をいふと家庭から放逐されて居る人間なのよ。だから妾の親戚や知人なんかは、もう全然妾を振向ひても見ないんです。殊に妾がうろ〳〵道路でも歩いて居ようものなら、すぐに巡査が來て拘引してしまう位ですわ。それでも貴郎は眞實に妾と結婚しようと思ひますか？

モーリス　吾々は互に馬鹿にし合つて居るのだ。だが今の所では結婚しよう。それがつまり吾々の追放された、純潔な飾り氣のない別天地なんだから。併かしアンリエット、お前は吾々がお互の運命を一つに結び附けてしまう前に、お前の秘密を、殘らず私に告白けなけ

ればいけないよ。そうしたら多分私達は一層よく釣合つた間柄になるだらうからな。

アンリエット　えゝ告白けますとも。實は妾に苦境に陷つて居るお友達があつたのです――解つたでしよう。所で妾は其女の進退が愈々谷まつたら、何とかして助けてやらうと思つて居たのですが――其内に到々其お友達が死んでしまつたのです。

モーリス　それは不周到だつた。併かしまづ〳〵尊敬すべき行爲には違ひない。

アンリエット　今は貴郎もそういつて居ますが、次ぎを聞いたら、屹度忍袋の緒を切つて、妾を咎めるに定まつて居ます。

モーリス　いや、咎めまい。併かし唯お前に對する信仰が動搖したり又お前を恐れるようになる事だけは拒む事は出來まいが。所で其女の戀人は、今でもまだ生きて居るのか？又其戀人は、一體お前にどれ程の罪があるかといふ事をよく承知して居るのか？

アンリエット　でも其人だつて矢張り妾に劣らぬだけの罪があるのですもの。

モーリス　だが若しか其男が、良心の呵責に遭ひ出すか――これはそうあるべき事だが――又自分の罪惡を悉く懺悔してしまひたいといふ考へを起す時が來れば、お前はもう捨てられてしまうのだよ。

アンリエット　えゝ、よく知つて居るんです。今までに妾が、對手の

男が少しても目醒めかゝると、すぐに又他の男に飛び込んで行つたのも全くは絶へずそれを恐れて居たからなんです……だから妾の良心の完全に覺醒して居るといふ事は、決して今までにありませなんだ。

モーリス　それてお前は、其恐れと撞着なしに私の持參金を受取らうと思つて居るのだね。それは餘りうま過ぎる願望だよ。

アンリエット　然かし妾が、殺人犯のモーリスといふ辱しめを、分擔するのに比較すれば――

モーリス　あゝ、もう其事は止しだ！

アンリエット　いゝえ、まだ止す事は出來ませんわ。妾は貴郎がちや

んとなるようになるまでは把へて居る此手を滅多に放さないんです一體貴郎は、妾以上に自分の周圍を、綿密に考へる事が出來ないんですもの。

モーリス　てはお前は、私に戰ひを挑むんだね？　よし、お前の好いようにするがいゝ！

アンリエット　えゝ、生きるか死ぬかの戰ひです！

遙かに太鼓の音聞ゆ。

モーリス　もう庭園が閉まるのだ。『汝の故に地は呪はれたり。見よ、茨と薊は汝の前に生ぜん』

アンリエット『神エホバ又女に曰ひけるは――』

園丁（制服を着し、兩人の前に來りて慇懃に）誠にお氣の毒ですが、もう庭園を閉めなければなりませんので——

第二場

牛乳舗。カトリヌ夫人、帳場に座し、會計簿の記入をなす。

アドルフ、アンリエットの兩人、適宜の卓子に座を占む。

アドルフ（快活にしかも親切に）だが、私は決してお前達を避けたのではない。いや私は又反對にお前達こそ私に對して信義を僞つたのだと考へて居た位なのだ。これは私が誓つてもいゝ。だからお前もそれを認めて呉れなければ——

アンリエット　それでも貴郎は、あの人達を探偵ではないといつて、妾達を愚弄にしたぢやありませんか？

アドフル　實は私自身でも探偵だとは思つて居なかつたのだ。だからお前達にそう斷言したのだ。

アンリエット　貴郎がそうおつしやるなら、妾それを信じますわ。だから妾が心の底に秘めて居る眞實の思考を告白けたら、貴郎だつてそれを信じてくださらなければ不可ませんよ。

アドルフ　兎に角まあ、談して御覽。

アンリエット　だが貴郎、復た日常のようにお伽噺や幻想みたいな事をいひ出して、談話の邪魔をしては不可ませんよ。

アドルフ　お前は私にそうされるのが怖ろしいと見へるな。

アンリエット　いゝえ、怖ろしいからといふ譯ぢやないんですけれど

も妾は貴郎の性格も、又貴郎の懷疑論も、よく承知して居ますからね――所で其談話は決して人に他言をしては不可ないんですよ――さあ、他言をしないといふ約束をなさい！

アドルフ　あゝ、約束をするよ。

アンリエット　では話しますが、實際怖ろしい事なんです。實は妾あのモーリスさんが例の事件の罪人だといふ證據を握つて居るんです――さあ、證據とはいへなくつても、兎に角理屈に合つた疑ひなんです。

アドルフ　那麼事をいふものではないよ！

アンリエット　まあお聽きなさい、そして貴郎の好いたように判斷す

ればいゝぢやありませんか。それでモーリスさんがあの割烹店で妾と別れる時には、母親の不在を窺つて、唯マリヨンにだけ面會するといつて居たのでしよう。それだのに實際は其母親にまで會つたといふ事が解つて居るのです。だから、つまりあの人は妾を欺したのですよ。

アドルフ　それはそうかも知れない。併かしあの男が、お前に僞りをいつた其動機は、屹度此上もない善であつた筈だ。兎に角唯それだけの事實で、あの男が殺人犯の罪人だといふ斷定は決して出來やしない。

アンリエット　貴郎にはそれが覺れないのですか？――え？　それが解

らないのですか？

アドルフ　いや、些少も。

アンリエット　貴郎には其氣がないからですよ――では、もう妾は、唯告發する計です。そしてあの人に、自分があの犯罪のあつた時間に、其現場に居合せなかつたといふ辯解が出來るか什麼か檢して見ましようよ。

アドルフ　アンリエット、まあ忌な事をいふようだが、お前は――あの男も矢張りそうだが、もう發狂をするかしないかの境界線まで來て居るのだ。お前達二人は、猜疑といふ惡魔に捉へられて、人と人とを互に傷け合せるといふ那奴の魔術に罹つて居るのだよ。だか

らあの男も同じようにお前を疑つて、自分の子供を殺したのは、屹度お前だと思つて居るに違ひない。

アンリエット　えゝ、あの人はどうせ狂人なんてすもの、無論それ位の考へは持つでしようさ。

アドルフ　あの男の疑念を狂氣だといふお前自身の疑念は、一體何なんだ。

アンリエット　それよりも先づあの人に對する反證をお擧げなさい。てなければ妾の疑ひが誤つて居るといふ其證據をお見せなさい。

アドルフ　よし、最も易い事だ。第一今度の檢屍で、マリヨンの死因は、今一寸思ひ出せないが、何でも妙な名のよくある病氣だといふ

事が證明されて居るぢやないか。

アンリエット　それは眞實ですか？

アドルフ　其筋の報告書が、今日の新聞に發表されて居る位だから、確かに事實に違ひないさ。

アンリエット　那麼ものが何になります。報告書だなんて、其筋で都合のいゝように製造する事の出來るものぢやありませんか。

アドルフ　何をいふんだ、アンリエット——其儘で行くと、お前はもうその境界線を通り越してしまうかも知れない。殊に告發でもされようものなら、監獄へ叩き込れるぢやないか。注意しなけりや不可ないよ。（女の頭に手を置き）だがお前はそんなにモーリス君が憎いのか？

アンリエット　えゝ、もう何よりも！

アドルフ　愛が憎しみに變つたとすれば、其愛は已に萠え出る時から腐つて居たのだ。

アンリエット　（冷靜な氣分で）ぢや妾、一體什麼したらいゝんでしよう？教へて頂戴な、妾といふものを理解して居てくださるのは、貴郎唯一人なんですから。

アドルフ　だがお前はお說敎が嫌いぢやないか。

アンリエット　其他に何か妾にいつてくださる事はないんですか？

アドルフ　いや他には何にもない。だが私は其お說敎の爲めに、どれ程助けを得て居るか知れないのだ。

アンリエット　ぢやお說敎をしてくださいよ！

アドルフ　先づ人を憎む代りに、自分自身を憎みなさい。そして自分の缺點にぐつとナイフを突込んでそれを刳り取つてしまうのだ。お前が苦しむのも皆それが根原なんだから。

アンリエット　一體貴郎自身は什麼なんです？

アドルフ　又何事を措いても、モーリス君との關繫を斷つてしまはなければ不可ない。お互に良心の急性疾患を增進させられないように二人が別々の生活に歸へるのだ。猶ほ藝術家といふお前の境遇も根本から破壞してしまう必要がある。お前が藝術の王國に足を踏み入れたのも、要するに唯自由と興味に對する慾求を充たしたかつたに

過ぎない――又それが所謂藝術家なるものゝ主張なのだ。だが藝術的生活といふ美しい名の下に、どれ程の興味が得られるかといふ事は、もう大概お前にも解つた筈だ。だからお前も、いつそお母さんの家庭へ歸つて、お前の境遇を一新したがよからう。

アンリエット　厭な事です！

アドルフ　ては何處か他の所へでも。

アンリエット　だがアドルフさん。貴郎は妾が、貴郎の深い秘密も、又何故貴郎が賞牌を受取らなかつたかといふ理由も、皆ちやんと察して居るのを知つて居るでしよう？

アドルフ　あゝ、お前は談話を半分聞いて早合點をして居るのだな？

アンリエット　まあいゝわ――それだのに貴郎には什麼して安心が得られたのです？

アドルフ　私は何かお前に那麼暗示を與へるような事をいつたかしら？兎に角私は自分の罪惡を自覺したのだ。悔悟したのだ。そして私の生活を一新して、宛然悔ひ更めた人間のような人生を送つて居るのだ。

アンリエット　まあ、貴郎だつて妾と同じように良心なんていふものは持つても居ない癖に、什麼して悔ひ更めなんかゞ出來たのでしよう？一體悔ひ更めつて矢張り信仰と同じく人々に授けられる神の恩惠なんですか？

アドルフ　總ての事が皆悉く神の恩惠だ。併かしそれは求めなければ授けられない――だからさあお前も求めなさい！

アンリエット　默して居る。

アドルフ　だが授けられる時の來るまで待つて居なければ不可ない。そうでないと、却つて自分を再び出る事の出來ない罪惡の深所へ突き込むような結果に陷る。

アンリエット　（暫くして）良心つて罰を恐れる事なんですか？

アドルフ　いや、吾々の劣等な個性が行つた惡い行爲に對して、善良な個性が感じる恐怖が其良心なのだ。

アンリエット　それでは妾にだつて、矢張り良心がある筈なんですね？

アドルフ　無論お前にだつてあるよ。併かし――

アンリエット　アドルフさん、貴郎がつまりあの信者といふものなんでしよう？

アドルフ　いや、信者臭くもないんだ。

アンリエット　だつてそれは餘り變ですわ――ては宗教つて一體什麼ものなんです？

アドルフ　實は私も知らないんだ。又誰だつて其説明は出來やしまいと思ふよ。だが總て惡心のないものは信者になれないのだから、時としては私のやうに、罰となつて現はれる事もあるのだらうさ。

アンリエット　えゝ、宗教つて罰の事です。妾にはもう明確と自分のする事が解りました。ては左様なら、アドルフさん！

アドルフ　お前もう歸るのか？

アンリエット　えゝ、歸ります——貴郎のおつしやつた所へ。ては左様なら！カトリヌさん左様なら！

カトリヌ　貴女那麼にお急ぎなんですか？

アンリエット　えゝ。

アドルフ　送つて行つてあげようか？

アンリエット　いゝえ、いゝんです。妾一人で行きます。初めて此所へ來た時のやうにたつた一人で——麗かな春でした。妾が初めて此

所へ來て、自分と何の交渉もない別天地に住み換へたといふような氣のしたのは。そしてそこに何かの自由が潜んで居ると信じて居ましたのに、今ではもうこれつぱかりの自由もないんです。ては御機嫌よう！（立去る）

カトリヌ　妾もう屹度あの方は此所へ來まいと思ひます。又あの方が初めから全然此所へ來なければよかつたと思ひますよ。

アドルフ　あの女が此所で成就させなければならない或る使命を持つて居たといふ事すら認めてやる人がないんです。兎に角憐れむべき女です。最も憐れむべき女です。

カトリヌ　それは妾だつてそう思ひますわ。妾達初め皆憐れむべき人

間なんですもの。

アドルフ　殊にあの女は、吾々よりも餘計だといふ程の惡事はして居ないのです。

カトリヌ　それはそうかも知れませんが、まだ確にそうだと斷言する事は出來ませんわ。

アドルフ　夫人、貴女は全體罪を責めるに、餘り嚴格過ぎます。それぢや貴女には、今までに苟にも罪惡と認められるような行爲はなかつたのですか？

カトリヌ　（愕然として）無論妾なんかは罪だらけな人間ですわ。併かし若し貴方が、薄い氷の上へ乘つたが爲めに、水の中へ落ちたとした

ら、今度は他の人々に向つて、其所へ近寄つては不可ないと止めるだけの資格がある筈でしよう。又そうした貴方を嚴格過ぎるとか、不人情だとかいつて非難する人は決してありますまい。だから妾は、アンリエットさんが這入つていらつしやると直ぐに、モーリスさんに注意なさい！近寄つては不可ませんといつて止めてあげたのぢやありませんか。それだのにモーリスさんが聽き入れないものですから、到々落込んでしまつたのです。まるで我儘で剛情な子供のようなんです。尤もいくら大人だつて那麼事をすれば、矢張り腕白小僧みたいにお仕置を受けなければなりませんわ。

アドルフ　でもあの男はもう可なりお仕置を受けてゐるぢやありませ

んか？

カトリヌ　えゝ。でもまだ受け足りないと見へて、行く先々で盛んに不平を鳴らして居るんですつて。

アドルフ　いや恁麼錯雜した問題に對しては、それが一番通俗的な解釋ですよ。

カトリヌ　まあ厭だ！其通り貴方はすぐに哲學を引張り出すから打ち壞してしまうんです。那麼謎のような事をいつて居る間に、巡査が貴方を連れて行つて、其謎を解いて呉れるような事になつてしまいますわ。もう彼所へ行つてください。妾まだ記帳をしなければならないんですから。

アドルフ　おや、モーリス君が來た。

カトリヌ　あゝ、眞實です。神よ彼を祝福し給へ！

モーリス　（活々した顔附にて入り來り、アドルフの側に座を占め）やあ、今晩は！

カトリヌ夫人、唯一寸頷きたるのみにて、記帳を續ける。

アドルフ　やあ、君什麼だね？其後は。

モーリス　あゝ、漸く曙光を認めたよ。

アドルフ　（モーリスに新聞紙を渡したるも、受取らざる故）では君はもう新聞紙を讀んだのか？

モーリス　僕は新聞紙なんか讀まないんだ。醜惡な記事ばかり掲載してあるからね。

アドルフ　所が君が何よりも先に讀まなければならない記事が――

モーリス　もう澤山だ！虚僞計りの記事なんか――所で君、僕は又新らしい端緒を發見したよ。だが君は一體あの殺人事件の犯人は、果して誰れだと考へる？

アドルフ　誰れでもないさ！

モーリス　君はアンリエットが、あの小供の一人て留守居をして居た十五分の間、何處て何をして居たと思つて居る？――確かに其現場に居たのだ。だからあの犯人は正しくアンリエットなんだよ。

アドルフ　君は發狂して居るね？

モーリス　僕が？いやアンリエットこそ發狂して居るのだ。僕を疑つ

て告發するなんて脅迫した位だから。

アドルフ　實は先刻までアンリエットが此所に居たのだ。そして君と同じように、却つて自分を傷けるような事をいつて居たよ。君達は二人とも發狂して居るのだ。全體マリヨンの死因は、第二回の檢視によつて、僕は一寸其病名を忘れたが、何でも一般に知られて居る普通の病氣てあつたといふ事が證明されて居るぢやないか。

モーリス　それは虚僞だ！

アドルフ　あの女も矢張りそういつたよ。併かし當局の報告書が、新聞紙上に發表されて居るのだから。

モーリス　報告書？ては關係者がそれを揑造したのだ。

アドルフ　それも矢張りあの女のいつた通りだ。君達二人は丁度同じような精神病に罹つて居るのだ。だが僕は全力を盡して、あの女が自分の本性を自覺するように、説破してやつたよ。

モーリス　それてあの女は何處へ行つたのだ？

アドルフ　新らしい生活を初める爲めに、遠い所へ行つてしまつた。

モーリス　ふん！ふん！——所で君は葬式に列つて呉れたのかね？

アドルフ　あゝ會葬したよ。

モーリス　無事に濟んだかね？

アドルフ　あゝ無事に濟んだ。それにジャンヌさんも、もうすつかり諦めたと見へて、君に對して何一つ恨みがましい事もいつて居なか

つたよ。

モーリス　實際あれは善良な女だ。

アドルフ　それだのに君は何故あの女を捨てたのだ？

モーリス　僕は發狂して居たから——自負心の爲めに、猛烈に煽動されて居たから——殊にアンリエットと二人て、熾にシャンピンを呼つて居たものだから——

アドルフ　今といふ今こそ、君がシャンピンを命じた時に、ジャンヌさんが泣いた其眞の理由が、君に理解出來たらう？

モーリス　あゝ、泌々と理解つた——だから僕は、あの女の宥恕を求める爲めに、たつた今詫手紙を發した所なのだ——だが君、あの女

が果して僕の罪を宥して呉れるだらうか？

アドルフ　無論宥して呉れるよ。一體人を憎むような、那麼性格の女ではないのだから。

モーリス　心の底から宥して呉れるだらうか？そして復た以前の愛に立歸つて呉れるだらうか？

アドルフ　さあそれは僕にも解らない。全體君はあの女に對して、隨分信實を缺いて居たから、此上あの女が、君と運命を共にするか什麼かといふ事は頗る疑問だよ。

モーリス　だが僕はあの女が、まだ幾分僕を好いて居るような氣がするから、屹度復た舊の愛に立歸つて呉れるに違ひないと信じるよ。

アドルフ　什麼して君にそれが解るのだ？什麼して那麼事が信じられるんだ？君はあの女を疑つて、アンリエットに探偵を差し向けたのは、あの女と、あの正直な弟とが、復讐の爲めにした事だと斷言したぢやないか？

モーリス　併かし今では僕は、もう那麼事を思つて居やしないよ——エミールだなんて、高がお目出度い人物なんだから。

カトリヌ　鳥渡貴方！エミールさんが何ですつて？無論あの人は勞働者には違ひありませんさ。だがあれ程正直な人が何處にあります？唯幾何か氣が利かない所はあるかもしれませんけれども外に、何一つ缺點のない人ぢやありませんか。

エミール入り來る。

エミール　ジエラートさんはゐらつしやいますか？

モーリス　あゝ私だよ。

エミール　失禮てが少し秘密に申しあげたい事がありますので――

モーリス　構はずにお話し。此所に居るのは皆友人計りだから。

僧侶登場、適宜の椅子に座を占む。

エミール　（僧侶を瞥見して）ては何れ後程――

モーリス　いや差し支へないんだ。此僧侶だつて矢張り私の友人なんだ。尤も少し意見は合はないが。

エミール　貴方は私がお解りてしよう？　モーリスさん。實は姉から貴

方のお手紙の返事の代りに、此嚢を差しあげて呉れと賴まれましたので――

モーリス　嚢を受取り、其口を開く。

エミール　猶ほ私は姉の後見をして居りますので、姉の身の上は私の身の上てすから、私から序にいつて置きますが、今てはもう貴方と姉との間には、何の干繋も殘つて居ないのてすから、此上貴方が、姉に對して何かと心配してくださるには及びませんよ。

モーリス　併かしお前の方には、まだ私に恨が殘つて居る筈だ。

エミール　私が恨む？　私にはてんて其理由が解りませんよ。それよりも私は、幸ひ恁うして貴方のお友人もゐらつしやるのてすから、其

前で貴方の口から、私にしろ又姉にしろ、アンリエットさんに探偵を差し向けるなんて、那麼事をする人間ではないと信じると、明白言明て頂きたいんです。

モーリス　ては前言を取消そう。猶ほお前が聽いて呉れるなら謝罪もするよ。

エミール　えゝ、それてよろしうございます。ては貴方も皆さんも御機嫌よう！（立ち去る）

一　同　左様なら！

モーリス　此襟飾も手套も、私の劇が舞臺に上つた最初の日に、ジャンヌが祝つて呉れた品だ。それを私が、アンリエットに火爐の中へ

投げ込ませてしまつた筈だのに、一體誰が引張り出したのだらう？総ての事が皆悉く穿り出されて、元の通りに返つて來る——そう〳〵、あのジャンヌが墓地の中でこれを私に呉れる時にそういつたつけ、『貴郎、少しは他の方達にも好かれるように、御自分の風彩を美しくなさい』つて——しかも自分は、獨りて淋しく宅に殘つて居たのだ——屹度什麼にか腹も立つたらう。又そうあつて然るべき事だ。あゝ僕にはもう眞面目な人達と交際するだけの資格がないんだ。あゝあゝ、善意を籠めた贈品を嘲けつたり、又僕を幸福にする爲めに捧げて呉れた犧牲まで侮蔑するなんて、何だつて僕は那麼事をしたのかしら？そうだ！僕は塵溜の中に棄てゝある桂を戴く爲めに、頸

架を羽められて居る筈の胸像を抱擁く爲めに、其贈品も其犧牲もみんな放擲つて見向きもしなかつたのだ。方丈さん、私もう貴僧に降服します。

僧侶　えゝ、歡迎します！

モーリス　どうぞ私に必要な福音を與へてください。

僧侶　貴方は一體自分の罪惡を認めないで濟むように、又これまでに少しも惡い事はしなかつたつていへるように、私がしてあげると思つてゐらつしやるのですか？

モーリス　何卒もう那麼ふうにおつしやらないで——

僧侶　貴方がそうおつしやるならいひますが、貴方のなすつた事は實

際此上もない惡い事です。こりやもう貴方にだつて氣がついてゐるでしようが。

モーリス　什麼したら、一體什麼したらいゝでしよう？

僧侶　私が知つて居るだけの事は、貴方だつてよく御承知の筈です。

モーリス　いゝえ、私の知つて居るのは、唯私が捨てられた事と、私の生活が腐らされた事と、私の地位が奪ひ去られた事と、現世での私の名譽が永久に廢毀たれたといふ事だけです。

僧侶　だから貴方は、現世の外に、もつと善良な世界の實在を信じて其中で新らしい生活を得たいといふ氣になつたのですね？

モーリス　えゝ、其通りなんです。

僧侶　貴方は今まで肉に生きて居たのです。それが今では、靈に生きたいと望んで居るのです。ては貴方は、もう確かに現世の中に、貴方の心を動搖させるものは、決してないと信じますか？

モーリス　ありませんとも。名譽なんて高が一つの幻像ですし、金貨だつて敢て枯葉と選ぶ所はありませんし、又女だつて唯一種の魔醉劑に過ぎないです。何卒もう私を貴郎の聖められた神殿の中へ隱して、二日の間も魔され通して、まだ其上、現世は勿論、墓場の向ふの永劫まで、醒める事のない、恁麼怖ろしい惡夢から、早く目覺めさせてください。

僧侶　承知しました！併かし此所は、心を籠めてそういふ事の出來る

場所ではありませんから、今夜の九時に、更めてサン・ジエルマン教會でお目に掛りしやう。丁度私がサン・ラザレのお籠り連に說教をする筈になつてゐますから、貴方が悔悟の險路を辿り初める足試しには持つて來いだらうと思ひますよ。

モーリス　悔悟ですつて？

僧侶　それが貴方のお希望では——

モーリス　そうです！そうです！

僧侶　ては說教が濟んだら、二人で夜中の十二時から二時までの間、徹宵して祈禱を捧げましよう。

モーリス　えゝ、そりやすばらしい事です！

僧侶　さあ、躊かないように手を執ってあげましょう。

モーリス　（立上って手を差し出し）えゝ、何卒――これで私の心も決定まるのです。

下婢　（庖厨より入り來りて）モーリスさんにお電話です。

モーリス　誰からだ？

下婢　劇場からです。

モーリス立って行かうとする。僧侶其手を捉へて離さず。

僧侶　（下婢に）用件を尋ねて御覽。

下婢　モーリスさんが今晩公演の監督に來てくださるか什麼か尋ねて呉れとおっしゃいました。

僧侶　（立行かんとするモーリスに）不可ません。私は貴方を放しませんよ。

モーリス　公演って一體何の公演だらう？

アドルフ　何故君は新聞紙を讀まないのだ？

カトリスと僧侶　モーリスさんは新聞紙を讀まないんですって？

モーリス　新聞紙の記事なんて皆虚僞か誹謗ですもの（下婢に）今晩は他に約束がありますからといって斷って呉れ。私は教會へ行くつもりなんだから。

下婢庖厨へ去る。

アドルフ　君が新聞紙を讀むのが厭なら、僕から話すが、君が警察署を釋放されると同時に、君の劇が復た再び上演されたのだ。殊に文

壇に立つてゐる君の友人等は、皆確に君の藝術的天才を認めたものだから、今夜それを公式に表彰する計畫をして居る。

モーリス　そんな事があるものか。

一同　いや事實なんです。

モーリス　（躊躇して）でも私にはそれを受けられる筈がない！

僧侶　そうですとも！

アドルフ　それに君、まだ其上――

モーリス　（兩手で頭を抱して）まだ其上？

カトリヌ　えゝ十萬法です！それが貴方に返へつて來るんです。ね、解つたでしょう？又市外の別莊もです。アンリエットさんの外は、

何もかも皆貴方に返へりかゝつて居るのですよ。

僧侶　（笑ひながら）夫人、貴女もう少し眞面目におつしやつてくださらなければ――

カトリヌ　ほゝゝ、妾には出來ませんわ。ほゝゝ、妾もう眞面目になんかなつて居られませんわ（ハンカチーフを口に當てゝ堪へ難げに大笑する）

アドルフ　おいモーリス君、演劇は八時から始るのだよ。

僧侶　だが教會の說敎は九時からです。

アドルフ　モーリス君！

カトリヌ　モーリスさん、結局貴方は什麼する積りなんです？

モーリス、卓子の上に兩肘を突いて頭を抱へる。

アドルフ　（僧侶に）貴僧、もうモーリス君を放してやつてください！

僧侶　いや放すとか、縛るとかいふのは、私に出來る事ではありません。モーリスさんが自身でそれをしなければならないんです。

モーリス　（立上つて）えゝ、私は貴僧と一緒に行きます。

僧侶　まあお待ちなさい。全體私には唯貴方に小言をいふだけの事しか出來やしないのです。又それだけの事なら貴方が自分だつて屹度出來る筈です。殊に貴方は、自己といふものに對しても、又名譽といふものに對しても、或る義務を負擔して居る筈でしよう。だが貴方がこんなに速く此事件を切り抜けて、其義務を完うする事が出來るようになつたのも、永久に熄む事のないといふ嚴しい罰の怖ろし

さを覺つたお蔭だと思ひます。しかも神はもう貴方をお赦しなすつたのですから、其上私のする事は何にもありません。

モーリス　併かし罪もない私が、何故恁麼嚴しい罰を受けなければならなかつたのでしよう？

僧侶　嚴しい？たつた二日位で！殊に貴方には決して罪がなくはありませんでした。一體人間は、自己の思想に對しても、言語に對しても、又慾望に對しても、皆悉く責任を持たなければならない筈です。それだのに貴方は、其惡心で、自分の子供の死ぬのを希望したのですから、貴方は已に思想上の殺人犯人です。

モーリス　えゝ、貴僧のおつしやる通りです。だが私はもう決心しま

した。今晩は私の罪滅しをする爲めに、教會で貴僧にお目に掛りましょう――だが明日の晩は、私劇場へ行くんです。

カトリヌ　まあ、うまい解決ね、モーリスさん。

アドルフ　あゝ適切な解決だよ。ふゝ――

僧侶　えゝ、眞にそうです！

幕――（完）

著作權所有

松本

不許複製

大正三年四月二十日印刷
大正三年四月二十日發行

著者　松本武雄　東京市日本橋區通二丁目九番地
發行者　濱口保太　東京市四谷區永住町二番地
印刷者　藤安藤五郎　東京市赤坂區田町七丁目三番地
印刷所　日本出版印刷株式會社

定價　金八十錢

發行所　東京市日本橋區通二丁目九番地　濱口書店　振替貯金口座　東京二四六二三番

270
266

終